

一

久助君（きゆうすけくん）はおたふくかせにかかって、五日間学校を休んだ。

六日めの朝、みんなに顔をみられるのははずかしいなと思いつながら、学校にゆくと、もう授業がはじまっていた。

教室ではあんのじょう、みんながさあツとふりむいて久助君のほうをみたので、久助君はあがつてしまつて、先生のところへ欠席届をだし、じぶんの席へ帰るまでに、つくえのわきにかけてある友だちのぼうしを、三つばかりはらい落としてしまった。

さて、じぶんの席について読本（とくほん * 国語の教科書）をひらいた。

となりの加市君（かいちくん）が、いま習っているのは十課だということを、指でさして教えてくれた。

もう十課まですんだのか。久助君は八課の「雨の養老（ようろう）」を習っていたとき、なんとなく左のほおが重いのに気がつき、その日から休んだのだった。

じぶんが休んで家でねていたときに、みんなは八課ののこりと九課を習ったんだな、と思うと、久助君はいまここにみんなといっしょに読本をひらいて先生のお話をきいていながら、みんなの気持ちとなじめないものを感じた。

そのとき先生から指でさされて、前のほうのどれかが読本の朗読をはじめた。

「第十、稲むらの火。これは、ただごとでない、とつぶやきながら五兵衛（ごへい）は家からきた……」

おやへんだな、と久助君は思った。ききなれない声だ。あんな声で読むのはいったいだれだろう。そこで久助君は本から顔をあげてみると、南の窓のそばの席で、ひとりの色の白い、セル地（* 和服用の薄い毛織物）の美しい洋服をきた少年が、久助君のほうに横顔をみせて朗読していた。久助君の知らない少年だ。

久助君はその少年の横顔をみているうちに、きみような錯覚にとらわれはじめた。じぶんはまちがって、よその学校へきてしまったのではないか、と思ったのである。いやたしかにこれは、久助君のかよつていた岩滑（やなべ）の学校の五年の教室ではない。いま読んでいる少年を久助君は知らないのだ。そういえば先生も、なるほど久助君の受け持ちだった山口先生に似てはいるが、別人であるらしい。友だちのひとりひとりも、久助君のよく知っている岩滑の友だちとどこか似てはいるが、どうも知らない学校の知らない生徒たちだ。五日間休んで、じぶんの学校をわすれてしまい、よその学校へはいつてきたのだ。これはとんでもないことをしてのけた。久助君はそんなふうにしたのだ。そしてすぐつぎのせつなに、やはりこれは久助君のもとの学校であるということがわかって、久助君はほつとした。

休けい時間がきたとき、久助君は、森医院の徳一君（とくいちくん）にきいた。

「あれ、だれでエ。」

南の窓ぎわの色の白い少年は、まだ友だちができないのか、ひとりでえんぴつをけずっていた。

「あれかア。」

と徳一君は答えていった。「あれは、太郎左衛門（たろうざえもん）て名だよ。横浜からきたアだけな。」

「太郎左衛門？」

久助君はわらいだした。

「としよりみたいだな。」

徳一君の話によると、その転入生のほんとうの名は太郎左衛門というんだが、それではあまりとしよりじみていて、太郎左衛門がかわいそうだから、子どものうちは太郎と家でもよんでいるので、子ども仲間でもそうよぶようにさせてくれと、一昨日（いっさくじつ）太郎左衛門をつれてはじめて学校へきたおかあさんが、先生にたのんでいったのだそうである。それをきいて久助君は、なるほどおとなはうまいことを考えるものだなと思った。

こんなぐあいに太郎左衛門は、久助君の世界にはいつてきた。

二

岩滑の学校はいなかの学校だから、なんととっても都会ふうの少年はみんなの眼をひくのである。久助君

も最初からなんとなく太郎左衛門に心をひかれたのだが、よい機会がないので近づけなかった。徳一君にしても音次郎君（おとしろうくん）にしても　　できのよい連中はみな久助君とおなじような気持ちなのだ。それがおたがいにあまりよくわかつているので、だれも手をだそうとしないのであった。で久助君は、課業中（かぎようちゅう）にいつのまにか、太郎左衛門をじつとながめているじぶん気づくことがあった。

太郎左衛門は、久助君よりまえのほうの、南の窓ぎわにいたので、久助君のところからは、ちょうど右の大きい眼玉と、美しく光る髪の毛でとりまかれた形のよいつむじとがみえた。太郎左衛門はその大きい眼で、教科書の字を長いあいだみていては、おもむろに先生のほうへ視線をむけて話にききいつていた。どうかすると、課業にうんでかすかなとききをもらしながら、すこしせいをくずすが、またすぐ熱心に先生のほうをながめるのであった。それだけのことで、久助君には、太郎左衛門がじぶんたちのように、道のほこりや草の中でそだってきたものではないことがわかり、太郎左衛門をすきにもなれば、なにかものがなしい思いでもあったのである。

あるとき久助君は、いつものようにじぶんの席から、その美しい少年をながめていた。それはひとりの美しい少年であった。この美しい少年はいつたいなんという名だろう、と久助君は思った。そしてすぐ、なアんだ、太郎左衛門じゃないか、と口の中でいった。

ふいと久助君は、まえに江川太郎左衛門というえらい人物の伝記を、ある雑誌で読んだことをおもいだした。よくおぼえていないが、江戸時代の砲術家（ほうじゅつか）で、伊豆（いず）の葦山（いらかやま）に反射炉（はんしゃろ）というものをきずいて、そこでそのころとしてはめずらしい大砲を鑄造（ちゅうぞう）したという人である。そしてれんがをつみあげてつくったらしい反射炉の図と、びっくりした人のように眼玉の大きい、ちよんまげすがたの江川太郎左衛門の肖像（しょうざう）が、久助君の頭にうかんだ。

この少年太郎左衛門は、あの江戸時代の砲術家の太郎左衛門とおなじ名なのである。おなじ名ならばふたりはおなじ人間ではあるまいか。

しかしそんなはずはない。第一、江戸時代におとなだった太郎左衛門が、現在子どもになっているというわけがないのである。それではこの順序がぎゃくというものだ。

久助君はじぶんのばかげた考えをうちけした。にもかかわらず、久助君には砲術家太郎左衛門と、この少年太郎左衛門が同一人物のように思えたのである。江戸時代におとなだった人間がだんだんわかくなって、いまは少年になっているのだ。さまざま人間のなかには、そういうような特別な生き方をするのが、ひとりやふたりはいるかもしれない。眼がぎよると大きいところは、この太郎左衛門もあの太郎左衛門もいっしょじゃないか。久助君は、そんなことを口にだしていえば、ひとが一笑（いっしょう）にふしてしまうことは知っていたので、ただじぶんひとりで空想にふけるだけであった。

その日、学校から帰るとき、久助君は、太郎左衛門の三メートルばかりうしろを歩いていった。むろん久助君は、太郎左衛門のあとをつけてゆくつもりはないのだが、ぐうぜんふたりの帰る方向と歩く速度がおなじであったため、こういう結果になってしまったのである、とひとり弁解しながらついでいった。

あき地のそばを通っているとき、太郎左衛門はふいに久助君のほうをふりかえって、
「きみ、あの花、なんだか知っている？」

と、すこししゃがれた声で流暢（りゅうちょう）にきいた。そっちをみると、いぜんここに家があったじぶん花畑になっていたらしい一角に、小さな赤黒いさびげな花が二三本あった。

久助君は知らなかったのでだまっていると、
「サルビヤだよ。」

と、美しい少年の太郎左衛門は歩きだした。

むこうが話しかけたんだから、こっちも話していいのだと思って、久助君は、すこし胸をおどらせながら、
「横浜からきたの？」

ときいた。横浜からきたことはもう徳一君から聞いて知っていたから、いまさら大きく必要はないのだが、ほかにほなにもいうことがなかったのである。ところで久助君は、きいてしまっただけからひや汗が出るほどはすかしい思いをした。というのは、「きたの？」などということは、岩滑のことはではなかったからだ。岩滑のことはできくなら、「きたの？」あるいは、「きたアだけ？」というところである。しかし久助君には日ごろじぶんたちが使いなれていて、こつしたことは、この上品な少年にむかつてもちいるにはあまりげびているように思えた。と、久助君は岩滑以外のことは知っているわけでもなかった。そこで、どこのことばともつかない「きたの？」などという中途はんぱのことばが出てしまったのである。もし徳一君や加市君や兵太郎君など、日ごろの仲間がいまのことばをきいていたなら、あとで久助君は背中をたたかれたりしながら、どんなにひやかされるかしのれないのだが、ありがたいことにそれをきいたのは太郎左衛門だ

けである。太郎左衛門はまだ岩滑のことをよく知らないから、こんなことばも岩滑にはあるだろうくらいに思つて気にとめなかつたのである。

「ああ。」

とかれは答えた。それからまた赤い花のほうをみながら、

「ぼくのにいさん、あれがすきだつたのさ。画家なんだよ。」

画家というのは絵をかく人であることくらいはけんとうがつくが、じつさいの画家をみたことのない久助君には、こんな話になんと返事していいかわからないのである。

「おとしの秋ね、ベロナル（*催眠薬）で自殺しちゃつたの。」

自殺というのはじぶんで死ぬことだといふくらいは久助君にだつてわかるが、そんなことばを使うものは久助君のいままでの仲間にはひとりもいなかったもので、ただもつめんくらうばかりである。

じぶんの家の門のほうへまがりかけた太郎左衛門は、なにか思いついたように久助君のところへもどつてきて、

「きみ、いいもんあげよう、手をだしたまえ。」

といつた。久助君がもしもじしながら手をだすと、太郎左衛門は小さい万年筆みたいなものをその上でふつた。すると小さいみじん玉が一つぶ、久助君のてのひらの上にごぼれでた。太郎左衛門はじぶんのてのひらにもふりだすと、それを口の中へほうりこんで、門のほうへいってしまつた。久助君は、はじめ空気銃でつかうみじん玉かと思つたが、みじん玉にしては、てのひらにこころよい感じをあたえる、あの重みがないので、べつのものだと考えた。そしてともかく太郎左衛門のまねをして、口の中に入れてみた。

舌の先でしばらくまわしていると、にがいますいしるがとけて出たので、なんだ、こんなもん、かぜのときのまされるトンブクの丸みたいじゃないか、と思つてはきだそうとした。するととたんに、そのにがかつたものがすずしいあまさにかわつて、じつに口の中が爽快（そうかい）になつたので、久助君はひとりでクツクツとわらいだしてしまつた。なんだ、こんなもんか。ハツカのもとというようなものなんだな。しかしすぐにまた舌のさきがにがみをおぼえはじめ、久助君は顔をしかめずにはおれなかつた。しかしいまにまたすずしくあまくなるだろう、と思つてがまんしていた。はたしてまもなく、そのとおりになつた。これで久助君には、この丸のしかげがわかつた。にがなくなつたりあまくなつたり、交互にくりかえすようになってくるのだ。ところで、三度めににがなくなつてきたとき、久助君はもういやになつてはきだしてしまつた。それはとけて、茶色のつばになつていた。はきだしたあとで口をあけて空気をすいこむと、これはまた、なんとこの爽快なことだろう！ 久助君の小さな口の中に、すずしい秋の朝が、ごっそりひとつはいいりこんだみだ。久助君はその爽快味をまんきつするため、大きく口をあけて、はあッはあッと呼吸しながら、家まできてしまつたのである。

「なんだい、久は。仁丹のおいをさせてるじゃないか。」

とおかあさんがいつた。そこではじめて久助君は、なぞがとけて、そしてばかりになつてしまつた。仁丹なら久助君は百も知つていたのだ。もつとも食べたことはこんどがはじめてだけだ。

どうしてまた久助君は、ありふれた仁丹なんかを、なにかたいへんな、ふしぎなもののように思いこまされてしまつたんだろう。思えば思つほど、久助君にとつて、太郎左衛門はきみよつな少年であつた。

三

道から十メートルばかりはいつたところに、太郎左衛門の屋敷の門がある。光蓮寺の山門をすこし小さくしたような、さびた金具などのついた古めかしい門である。横に小さいくぐりがあつて、太郎左衛門はそれから出はいりし、門はいつでもしまつてゐる。

太郎左衛門といつしよにそこまできて、太郎左衛門が「しつけない。」とか「さよなら、またあした。」などといつて、そのくぐりからすつと中へはいり、あとにびつたりくぐり戸もしめられてしまつと、久助君は、いつたいこの門の中で太郎左衛門はどんなことをしているのだろう、おとなのことばでいえば、どんな生活をしているのだろう、とちよつと思つのであつた。しかし、あまりその中にはいつてみたいとは思わなかつた。

なにしろばかにしんかんとしてゐるのである。古めかしくてしんかんとしてゐる、そついつところを久助君はこのまないのだ。

あるとき久助君は、太郎左衛門についてその門の中にはいつた。

庭はあんがいせまかつた。だが久助君の眼をひきつけたものがそこにあつた。まっ四角な深い池で、底の

ほうに緑色のにごった水がよどんでいた。四方の石がきにはこけがいつぱいついて、石の色はすこしもみえない。つまりこの一升（いっしょう）ますのような形の池は、なにからななまで緑色である。そして水の中にはこいがあるらしい。ところどころ、水の緑色の中に、ほんやりした赤や、白がみとめられるのは、たしかにそれだ。久助君はしばらくのぞいてみると、なまぐさいやなにおいが鼻につきはじめた。そればかりかこの池ぜんたいが、なにか子どもによそよそしい感じをもっていることがわかったので、じきそばをはなれてしまった。

久助君はまねかれてふじの花のさいている縁側（えんがわ）のほうへいった。縁側と座敷はあかり障子（しようじ）でへだてられていたが、太郎左衛門が中から出てきたときあけっぱなししておいたところから、久助君は中をのぞくことができた。

久助君はそこにひとりの黄色いしごき（*女性用の帯の一種）をした少女をみた。きつと太郎左衛門のねえさんである。顔色が茶わんのように白くてやせていた。彼女は座敷のもうひとつおくの暗いへやから、金魚ばちほどのほやのついたランプを片手で持ち、もう一方の手でふすまをなでながらあらわれ、座敷のすみにおいてあるつくえをさぐりあてると、その上にランプをすえた。眼を大きく見ひらいているのに、手さぐりでそんなことをしているところを見ると、あきめくらなのだろう。なんにしても異様な光景である。久助君は息をのんでみつめていた。

つぎに少女は、マッチをすってランプに火を入れた。そしてつくえの前にすわると、だれもないのつくえのむこう側にだれかいでもするように、

「おとうさんが、はじめての航海でフランスのマルセーユにいったとき、その港のうら町の小さな道具屋でみつけたランプなんです。なんでもルイ十六世のものらしいっていつてらしたわ。」

としゃべった。久助君はぶきみになってみじろぎもできなかった。この少女はあきめくらであるばかりでなく、気がくるっているのだろう。

太郎左衛門がわらいながら「ねえさんのばかタン。」と前おきして、わけを話してくれたので、なんだ、そうだったのかと久助君は思った。太郎左衛門のねえさんは女学校でする学芸会の練習をしていたのである。

なんでもそれは、暴風の夜ふたりの姉妹が勉強していると、ふいに停電してしまうので、古いランプを持ちだしてきてもすのださうである。そうすると死んだ弟やら、いぜんなくした手まりやら、雨の晩にいなくなってしまう飼犬やらが、またふたりの姉妹のところにもどってくるという、なにがなにやらわけのわからない、ばかばかしい劇らしい。

久助君は、そこにいる白い少女が、あきめくらでもきちがいでもないことがわかったけれど、でもなんとなくきみがわるくて、しげんに眼や耳は少女のほうにひきつけられた。

彼女はつくえのむこうの、すがたもみえなければ返事もしない人に話をしつづけていた。

「アキ坊ちゃんはね、死んじゃったの。もう五、六年もまえの雪のふった晩に。」

相手の人がなにか答えているらしい。それが久助君には聞こえないが、彼女には聞こえるとみえて、耳をたてて聞いている。そしてまたいつ。

「この子、死ぬってこと知らないんだわ。死ぬってね、かくれんぼうでどっかへかくれて、いつまで待っても出てこないようなもんだよ。」

すがたのみえない相手になにかいうらしい。すると彼女はなにかおかしい返事をきいたのだろう、とつぜんクククククツとわらいだした。そしてこのわらうのが、じぶんで満足のゆくようにできないとみえて、彼女はなんどもやりなおした。「クククククツ」とか、「ウフッフッフツ」とかいつて。

久助君はもうがまんがでまなかつた。すぐ家へ帰ってしまった。

それからしばらく、久助君は、太郎左衛門の屋敷の門の前を通るときには、きつと、ふじの花のさいている明るい昼間だというのに、ランプをつけて学芸会の劇を練習している、色の白いぶきみな少女のことをおもいだしたのである。

四

だんだん太郎左衛門は、みんなと親しくなった。みんなは最初のうち太郎左衛門を尊敬して、すこしいにくかつたけれど、「太郎君」とよんでいた。

やがて太郎左衛門はみんなといっそう親しくなって、みんなにとりかこまれ、よっぱらいのように下品にしゃべりちらしていることもあった。するとみんなは、太郎左衛門を尊敬したりするのはふさわしくないことがわかり、えんりよなく「太郎左衛門」とよぶようになった。

そのうちにみんなはもう「太郎君」とも「太郎左衛門」ともいわなくなってしまう。というのは、太郎左衛門はつきあってもいつころおもしろくない、つまらないやつだということが、みんなにわかってしまったからである。

はじめからいまにいたるまで、「太郎君」という礼儀(れいぎ)正しいよびかたをつづけている人がただひとりあった。それは受け持ちの山口先生である。

太郎左衛門がうそをつくというつわさがたちはじめたのはそのころであった。

「あんなやつのはなにも信用できん。」

というものもあった。久助君は、そんなこともあるまいと思った。しかしあるいはそうなのかもしれないとも思った。

ある日、兵太郎君が五、六人の仲間にもわかって、なにかいっしょうけんめいにふんがいていた。久助君がなんだろうと思つて聞きにゆくと、「こつだつた。」

兵太郎君が太郎左衛門にいつぱいくわされたというのである。午ヶ池(うまがいけ)の南の山の中に深くえぐられた谷間がある。両側のがけがちょうどびょうぶを二まいむかいあわせて立てたようになっている。太郎左衛門は、そういうところならともおもしろいことができるかと兵太郎君にいつたのだそうである。つまり、かた一方のがけの上からむこうのがけにむかつて、「おーい。」とひと声よびかけると、それがこだまになってこちらへ帰ってくる。そして、こちらのがけにぶつかるや、またこだまになってむこうのがけに帰ってゆく。むこうにぶつかつてまた帰ってくる。こちらにぶつかつてまたむこうへゆく。そうしていつまでもそのひとつの「おーい」は消えないのだという。ある科学の雑誌に書いてあったからほんとうだと太郎左衛門はあかしまでたてたのだそうだ。それならほんとうだろつと思つて、兵太郎君は、きのう午ヶ池へつりにいつたついでに、例のところまでいつてためしてみたのである。そして太郎左衛門のことばが「うッそ」であることがわかつたといふのであつた。

これじゃたしかに太郎左衛門はうそつきであると久助君は思つた。するとどうしたわけか、学芸会のけいこをしていた太郎左衛門のねえさんをおもいだした。だれも相手がいないのに、じつさいにいるようにじょうずにしゃべつていたあの白い少女のことを。

またあるときこんなことがあつたそうである。雨をともなつたはげしいかみなりが頭の上をすぎていつたあと、太郎左衛門が新一郎君に、「いま雲の中からひばりが一わ、かみなりにうたれてむこうに落ちたからみにゆこう。きつと牛市場のあたりに落ちてゐる。」

と声はずませていつた。新一郎君はまさかうそとは思わなかつたので、いつていつてまだぬれている牛市場の草をふみわけふみわけ、すみからすみまでさがしたが、牛のふんしか落ちてなかつたそうである。これも、太郎左衛門のうそであつたわけだ。

五

太郎左衛門が学校へ、どびんのふたぐらひの大きさの、まるいへんなものを持ってきて、

「これね、とつてもおもしろいんだよ。」
といつた。

みんなは、太郎左衛門がうそつきであることは承知(しょうち)していつたが、いつでもそれを警戒(けい)かい)しているわけにはいかなかつた。ことに、こんなぐあいにめずらしいものを持ってきたときには、つい好奇心のためゆだんしてしまうのである。

太郎左衛門の説明によれば、そのまるいものは象牙(ぞうげ)でできていて、支那人(しなじん)が横浜で売つていたのだそうである。そいつを耳にうまいぐあひにあててみると、音楽が聞けるしかけになつているといふのである。

まず森医院の徳一君からはじめて、みんなはそれを順番に耳にあてがつてきた。みんなが、聴診器(ちようしんき)を耳にしている医者のように、しんちよつなおももちできいてると、太郎左衛門は、
「ね、聞こえるだろう。マンドリンみたいな音が。あれ、支那の琴なんだつて。」

といつた。すると、「うん、うん。」となま返事をするものもあつた。「うん、ちいせい音だなあ」といつて、にっこりするものもあつた。「聞こえやしんげや」といつて「三度ぶつてまたあてがつてみるものもあつた。」

「また太郎左衛門のうそだア。」
と太郎左衛門がいるのにそいつたものがあつた。それは兵太郎君であつた。しかしこの場合みんなはむし

る兵太郎君を信じなかった。というのには、兵太郎君は十日ほどまえから、かたほうの耳が耳だれでいやなおいのする緑色のうみをだらりとたらしめていたので、みんなが例の音楽の道具をかそうとしなかったため、くやしがつていたからである。

久助君の番がきた。うけとつてみると黄色なつるつるの美しい象牙である。どびんのふたのように一方がくぼんでいる。そしてくぼんだところのまん中に小さいへそみたいなものがとび出ている。そのへそを、うまく耳の穴にはめこんで聞くのだそうである。

「うーう」とモートルのうなつているみたいな音がはじめ聞こえた。その「うーう」のなかに、マンドリンの音がまじつてやしないかと、一心ふらんきにきいてみると、なるほどかすかに、ピンピンペンペンというような音が聞こえる。聞こえるような気がする。

「うん、聞こえる聞こえる。」

と久助君はいつつぎのものにわたしたのであった。

それからまもなく、あしたは春の遠足という日に、久助君はじしやくをさがすため、茶だんすのひきだしをみなひっぱりだして、いろんなガラクタのなかをかきまわしていた。するとなかから、太郎左衛門が持っていたのおなじ象牙のまるい道具が出てきた。

「うちにもこれがあつたんだなア。」

といつておとうさんに聞いてみると、それはいぜんたばこをのむ人が持っていた火ざらというものだそうである。そのさらの上はまだ火のついていてるすがらをのせておき、つぎのたばこにすいつけるための道具なのだそうである。

「それでも、ここにこんなへそみたいなものがあるのはどういふわけだん？」

と久助君はあまりのばかばかしさにすこしはらをたてていった。そのへそには小さい穴があつて、そこにひもとおしたにすぎないとおとうさんは教えてくれたので、もう久助君はなにもいうことがなかった。ままと太郎左衛門にいつぱいくわされたのである。

それにしてもなぜ太郎左衛門はあんなうそをつくのだろう。なんといつわけのわからぬやつだろう。

よく日久助君は、教室の窓にもたれてぼんやりしているうそつぎの太郎左衛門の顔を、かれに気づかれぬよう、こちらのひとかげから、まじまじとながめていた。そしてさらにきみょうなことを発見したのである。

それは太郎左衛門の眼は、左右、大きさがちがうということである。右の眼は大きい。左は小さい。そしてそのうえおかしいことに、大きい眼は美しいなごやかな、てんしんらんまんな心をのぞかせているのに、小さい眼はいんけんひねくれている、狡猾（ことうかつ）なまたたきをするのである。

こいつはへんだと、久助君がいっしょうけんめいみていると、さらに、耳も左右大きさと形がちがひ、鼻でさえも、左の小鼻と右の小鼻はちがっているのだ、すこしゆがんでみえることがわかった。

久助君は考えた。太郎左衛門はひとり人間じゃなくて、ふたりの人間が半分ずつよりあつてできているのじゃあるまいか。いぜん、久助君は、ねんどで人形を製造するのを見たことがある。まず二つの型によつて、人形は半分ずつから二つの半分がうまく合わさつて、一つの人形になるのである。神さまがわれわれ人間をつくりだすのもあれとおなじ方法なのだろう。そして太郎左衛門はなにかのまちがいで、大きさがちがう、うまく合わない半分ずつが合わさつてできたのかもしれない。だから太郎左衛門のなかにはふたりの人間がはいっているのだ。

それなら、太郎左衛門が平気でうそをいったり、なにを考へてるのかわけがわからなかつたりするのは当然のことだと、久助君は思った。

六

ついに、みんなが太郎左衛門のうそのため、ひどいめにあわされるときがきた。それは五月のすえのよく晴れた日曜日の午後のことであつた。

なにしろ場合がわるかつた。みんなが　　というのは、徳一君、加市君、兵太郎君、久助君の四人だがたいくつでこまつていたときなのだ。

麦島（むぎばたけ）は黄色になりかけ、遠くからかえるの音が村の中まで流れていた。道は紙のように白く光を反射し、人はめつたに通らなかつた。

みんなはこの世があまり平凡なのにうんざりしていた。どうしてここには、小説のなかのように出来事がおこらないのだろう。

久助君たちはなにか冒険みたいなのがしたいのであつた。あるいは英雄のような行為をして、人びとに

強烈な感動をあたえたのであった。たとえば、いまその道の角を某国（ぼうこく）のスパイが機密（きみつ）文書を、免状（めんじょう）のようにまいて手にもってあらわれたとしたら、どんなにすばらしいだろう。

「スパイ待て！」とさげびながら、みんなどこまでも追ってゆくだろう。たといそのときスパイがピストルをぶっぱなして、こちらが道の上にはったりたおれるとしても、ちっともかまやしないのだ。

そう思っているところへ、その道角から太郎左衛門がひょっこりすがたをあらわしたのである。そしてかれはまっすぐみんなのところへくると、眼をかがやかせていった。

「みんな知っている？ つかばくらが献金（けんきん）（けんきん）してできた愛国号がね、新舞子（しんまいこ）の海岸にいまきていて、宙返りやなんか、いろんな曲芸（まげ）をしてみせるんだって。」

なにかできごとがあればいいと思っていたやさきだから、みんなは太郎左衛門のことばだったけれどすぐ信じてしまった。そしてまた、これはまんざらうそでもなさそうだった。みんなが二銭（にせん）にせん）ずつ献金をしたことはほんとうだし、新舞子の海岸には、その愛国号ではないにしても、よく飛行機がきていることは、夏、海水浴にいった者ならだれでも知っているからである。

みにいこう、ということにいつぺんで話がきまった。新舞子といえば、知多半島（ちまたんしま）のあちら側の海岸なので、峠（とうげ）を一つこしてゆく道はかなり遠い。十二三キロはあるだろう。しかしみんなのからだのなかには、力がうずうずしていた。道は遠ければ遠いほどよかったのだ。

太郎左衛門もくわえて一行（いっこう）はすぐその場から出発した。家へそのことをいつてこようなどと思つものはひとりもなかった。なにしろからだはつばめのように軽かった。つばめのように飛んでいってつばめのように飛んで帰れると思っていたのである。

とんだり、かけたり、あるいは、「帰りがくたびれるぞ。」などとかしこそうにおたがいを制（せい）（せい）してしばらくは正常歩（せいじょうほ）で歩いたりして、すすんでいった。

野にはあざやかな緑の上に、白い野ばらの花がさいていた。そこを通るとみつばちの翅音（はねね）（はねね）はおと（おと）がしていた。白っぽい松の芽が、におうばかりそろいのびているのもみていった。

半田池（はんだいけ）をすぎ、長い峠道（とうげみち）をのぼりつくしたところから、みんなは沈黙（しんもく）がちになつてきた。そしてもしだれかがしゃべっていると、それがうるさくてはらだたしくなるのであった。知らないうちに、みんなのからだにつかれがひそみこんだのだ。

だんだん、みんなはつかれのため頭のはたらきがにぶつてきた。そしてあたりの光がよわつたような気がした。じつさい、日もだいぶん西にかたむいていたのだが、それでも、もうひきかえそうというものはだれもなかった。まるで命令（めいれい）をつけているもののように先へすすんでいった。

そして大野の町をすぎ、めざす新舞子の海岸についたのは、まさに太陽が西の海にぼっしようにとっている日ぐれであった。

五人はくたびれて、みにくくなって、海岸に脚（あし）をなげだした。そしてぼんやり海のほうをみていた。

愛国号はいなかった。また太郎左衛門のうそだった！

しかしみんなは、もううそであるうがうそでなかるうが、そんなことは問題ではなかった。たとい愛国号がそこにいたとしても、みんなはもうみようとしなかつたろう。

つかれのためににぶつてしまったみんなの頭のなかに、ただ一つこついうおもいがあった。「とんだことになってしまった。これからどうして帰るのか。」

くたくたになって一歩も動けなくなつて、はじめて、こつこつこつこつは、分別（ぶんべつ）（ぶんべつ）がたりないやりかたである。じぶんたちが、まだ分別のたりない子どもであることを、みんなはしみじみ感じた。

とつぜん「わッ」とだれかなきだした。森医院の徳一君（とくいち）である。わんぱくものでけんかの強い徳一君（とくいち）がまさきになきだしたのだ。するとそのまねをするように兵太郎君（へいたろう）が「わッ」とおなじ調子でなきだした。久助君（きすけ）もそのなきこえをきいているとききたくなつてきたので、「うふうふン」とへんななきだしかただったが、はじめた。つづいて加市君（かいち）がひゅつと息をすいこんで、「ふえーん」とつまくなきだした。

みんなは声をそろえてない。するとみんなはじぶんたちのなき声の大きいのにびくりして、じぶんたちはとりかえしのつかぬことをしてしまつたと、あらためて痛切（つうせつ）（つうせつ）に感じるのであった。

そして四人はしばらくないでいたが、太郎左衛門は、ひろつた貝（かい）がらで足もとの砂の上にすじをひいてい

るばかりで、なきださないのであった。
ないでいない人のそばでないでいるのは、ぐあいのわるいものである。久助君（きすけ）はなきながら、ちよいちよい太郎左衛門（たろうざゑもん）のほうをみて、太郎左衛門（たろうざゑもん）もいっしょになければよいのに、と思つた。こいつはなんといいへんな、わけのわからんやつだろう、とまたいつもの感を深くしたのである。

陽（ひ）がまったくぼっして、世界は青くなった。最初に久助君のなみだがきれたのでなきやんだ。すると加市君、兵太郎君、徳一君という、なきだしとはぎやくの順で、せみが鳴きやむよつになきやんでいった。そのとき太郎左衛門がこういった。

「ぼくの親せきが大野にあるからね、そこへゆこう。そして電車で送ってもらおう。」

どんな小さな希望にでもすがりつきたいときだったので、みんなはすぐたちあがった。しかしそれをいったのが、ほかならぬ太郎左衛門であることを思うと、みんなはまた力がぬけるのをおぼえたのである。もしこれが、だれかほかのものがいったなら、どんなにみんなは勇気をふるいおこしたことだろう。

やがて、大野の町にはいったとき、みんなは不安でたまらなくなったので、

「ほんつけ、太郎左衛門？」

となん度もきいた。そのたびに太郎左衛門は、ほんとうだよ、と答えるのであった。が、いくらそんな答えをえてもみんなは信じることはできなかった。

久助君も太郎左衛門をもはや信じなかった。

こいつはわけのわからぬやつなのだ、みんなとはもの考えかたがまるでちがう、別の人間なのだ、と思いながら、みんなにたちまじっている太郎左衛門の横顔をすくくみていた。すると、太郎左衛門の横顔は、そっくりきつねのようにみえるのであった。

町の中央あたりまでくると太郎左衛門は、

「ううんと、ここだったけな。」

などとひとりごとしながら、あつちの細道（ほそみち）をのぞいたり、こつちの露地（ろじ）にはいったりした。それを見るとほかの四人はますますたよりなさを感じはじめた。また太郎左衛門のうそなのだ。いよいよ絶望なのだ。

しかしまもなく太郎左衛門は、ひとつの露地からかけだしてくると、

「みつかったから、こいよ、こいよ。」

とみんなをまねいたのである。

みんなの顔に、暗くてよくはみえなくっても、さアッと生氣（せいき）の流れたのがわかった。足が棒のようにつかれているのもわすれて、みんなはそっちへ走った。

いちばんあとからついてゆきながら、久助君は、だが待てよ、と心の中でいった。あまり有頂天（うちよつてん）になると、幸福ににげられるという気がしたからであった。なにしろあいては太郎左衛門なのだから、まにつけることはできないはずだ。

そう考えると、またこんどもうそのように久助君には思えるのであった。

そして久助君は、時計をならべた明るい小さい店のところにくるまで、太郎左衛門をうたがっていた。しかしそこがほんとうに太郎左衛門の親せきの家だった！

太郎左衛門からわけをきいておどろいたおばさんが、

「まあ、あんたたちは……まあまあ！」

とあきれてみんなをみわたしたとき、久助君はすくわれた、と思った。するときゆうに足から力がぬけて、へたへたとしきいの上ですわってしまったのであった。

それから五人は時計屋のおじさんにつれられて、電車で岩滑（やなべ）まで帰ってきたのであったが、電車の中では、おたがいにからだをすりよせているばかりで、ひとこともものをいわなかった。やすらかさと、つかれが、からだも心も領（うりやう）して、なにも考えたくなく、なにもいいたくなかったのである。

うそつきの太郎左衛門も、こんどだけはうそをいわなかった、と久助君はとこにはいったときはじめに思った。死ぬか生きるかというどたんばでは、あいつもうそをいわなかった。そうしてみれば太郎左衛門もけっしてわけのわからぬやつではなかったのである。

人間というものは、ふだんどんなに考えかたがちがっている、わけのわからぬやつでも、最後のぎりぎりのところでは、だれもおなじ考えかたなのだ。つまり、人間はその根もとのところではみんなよくわかりあうのだ、ということが久助君にはわかったのである。すると久助君はひどくやすらかな心持ちになって、耳の底にのこっている波の音をききながら、すつとねむってしまった。